



TITLE:

## 二つの體制間の貿易關係について

AUTHOR(S):

森田, 桐郎

---

CITATION:

森田, 桐郎. 二つの體制間の貿易關係について. 經濟論叢 1955, 75(2): 85-104

ISSUE DATE:

1955-02

URL:

<https://doi.org/10.14989/132402>

RIGHT:

# 經濟論叢

第七十五卷 第二號

---

- 財政と價值問題……………大 畑 文 七 (1)
- 2つの體制間の貿易關係について……………森 田 桐 郎 (19)
- 寄生地主制の形成過程……………内 藤 正 中 (39)
- ヴェ・イ・レビエヂエフ「17—18世紀の  
ロシアにおける農民諸運動の性格に關  
する問題によせて」……………福 富 正 實 (61)
- 

〔昭和三十年二月〕

京都大學經濟學會

## 二つの體制間の貿易關係について

森 田 桐 郎

は し が き

こんにち、資本主義市場の縮小化と經濟危機の深まりの中で、中・ソを中心とする社會主義陣營諸國との貿易の問題が、資本主義陣營諸國民の死活的問題として提起されている。われわれは、この現實の課題にこたえるために、二つの體制間の貿易關係についての原則的諸點を明らかにしようとするものであるが、まず本稿においては、二つの體制間の貿易問題の一般的基础について、及び全般的危機の第一段階におけるソ同盟と資本主義諸國との通商關係について、のべようとおもう。戦後の全般的危機の第二段階における問題及び日本における中ソ貿易の問題については、ついで別稿において解明しようとおもう。

第一段階の問題を中心に扱っている本稿の研究は、現在の問題を理解する際にも、重要な意義をもつものである。

### 一 問題の基礎

〔一〕 ソヴェト同盟における十月革命と社會主義の建設とによつて、すなわち世界が決定的に二つの體制——社會主義體制と資本主義體制——に分裂したことによつて、世界史上はじめて、二つの體制間の貿易關係という問題、いわゆる東西貿易という問題が提起された。すなわち、二つの體制の貿易關係という問題は、社會主義體制と資本

主義體制とが共存し互いに闘争する歴史的一時期の存在ということを基礎としている。

二つの體制の共存と闘争という歴史的一過程は、資本主義の發展過程の面からいえば、周知の如く世界資本主義體制の全般的危機と呼ばれている。資本主義の全般的危機は、すでに開始され展開されたプロレタリア革命が一国において勝利をしめ、更に全世界にわたる勝利をめざして進みつつある時代における資本主義の段階であり、資本主義の帝國主義段階の・從つて資本主義の全生涯の・終局的段階である。

資本主義の全般的危機、いかえれば、社會主義體制と資本主義體制とが共存し互いに闘争するという歴史的一時期が存在することの合法性は、レーニンが基礎づけ、スターリンが全面的に展開したところの、帝國主義のものととの資本主義の經濟的・政治的發展の不均等性の法則によつて説明せられる。資本主義の獨占段階——帝國主義の諸條件のもとでは、資本主義の經濟的・政治的發展の不均等性の法則は、「特別の力と鋭さをもつにいたる。」<sup>①</sup>「帝國主義の時代における發展の不均等性の法則の意味するところは、ある國々が他の國々にくらべて飛躍的に發展すること、ある國々を他の國々が世界市場から急速にしめ出すこと、すでに分割された世界を軍事的衝突と軍事的破局の方法で再分割すること、帝國主義の陣營内の不和が深化し激化する、こと、世界資本主義の戦線が弱化する、こと、この戦線が個々の國のプロレタリアートによつて破碎される可能性があること、個々の國での社會主義の勝利が可能であること、である。」<sup>②</sup>かくて、帝國主義の時期においては、社會主義のためのプロレタリアートの闘争の諸條件は根底から變化し、かつてマルクス及びエンゲルスによつて不可能とみなされていた、<sup>③</sup>一國における社會主義革命の勝利の可能性が生ずるにいたり、むしろ同時的な世界革命は不可能となつた。ここからして、一國におけるプロレタリア革命の勝利と、全世界にわたつて資本主義の絶滅をもたらすところの革命の世界的勝利との間には、一

つの歴史的時期がよこたわつてゐる、ということが理解される。ここに、ロシアにおける社會主義革命の勝利の合法則性、一般には一國における社會主義革命の勝利の合法則性、二つの體制間の貿易關係の發生の合法則性、があるのである。

(二) さらに、資本主義の全般的危機、すなわち二つの體制の共存と鬭争の時期は、これを世界經濟の發展過程という觀點からみれば、資本主義的世界經濟から社會主義的世界經濟への過渡期として把握される。この點について簡単に述べよう。

(a) 周知の如く、世界經濟は資本主義の發展とともにほじめて形式される。資本主義は、その内的必然性によつて、生産と交換の國際化をもたらし、民族の封鎖性を一掃し、諸民族を經濟的にちかずけ、廣大な諸領域を一つの連關した總體に次第に統合した。「ブルジョア社會の本來の任務というのは、世界市場を、少くともその輪かくからいつて世界市場をつくり出すこと、そしてこの世界市場に基礎をおく生産を作り出すことである。」<sup>④</sup>資本主義の發展のなかではじめて多種多様な諸民族は、國際的分業と全面的相互依存關係のきずなで結びつけられた。このなかではじめて、世界市場・世界市場價格などの、「特殊の國際的な經濟的範疇」<sup>⑤</sup>が形成された。

しかし、この傾向は、その内的な歴史的意義に全く照應しない、獨自の諸形態をとつて發展してきたのである。資本主義の發展過程における諸民族の相互依存と諸領域の經濟的統合は、平等な單位としての諸民族の協力によつて確立されたのではなくて、ある民族が他の民族に隷屬させるという形で、發展のおくれた諸民族が發展のすすんだ諸民族に抑壓され搾取されるという形で、確立された。先進國・工業國・帝國主義國の後進國・農業國・植民地從屬國に對する搾取と抑壓の關係、及び先進諸國・帝國主義諸國相互の間における敵對的競争の關係——これが、

資本主義の發展過程における諸民族の經濟的接近が、そのわくの中で進行してきた形態である。

マルクスは、一八四七年に、民族的搾取と抑壓の關係も、諸國民の敵對的對立の關係も、ともに資本主義的所有關係にねざしていることを指摘して次の如くのべている。――

「諸民族の利害が共通のものでありうるためには、現在の所有關係が廢止されることを要する。なぜなら、現在の所有關係は、諸民族それ自身のあいだにおける搾取を條件づけるからである。現在の所有關係を廢止すること、これだけが勞働者階級の利益である。そのための手段をもつものも勞働者階級だけである。ブルジョアジーに對するプロレタリアートの勝利は、同時に、こゝんち諸民族をたがい敵對させている國民的產業的爭鬭に對する勝利でもある。ブルジョアジーに對するプロレタリアートの勝利は、同時に、全被壓迫民族解放への合圖である。」<sup>④</sup>（傍點引用者）

また、スターリンは、マルクスの述べた右命題を更に發展させて次のように語つてゐる。

「今日の資本家的グループ自體のあいだの紛爭と軍事的衝突は、プロレタリアートとブルジョアジーとの闘争と同じように、現代の生産力と、その發展の一國的――帝國主義的なわくとの、また資本主義的占有形態との矛盾を、その基礎としてゐる。つまり帝國主義的なわくと資本主義的な形態とは、生産力をおさえつけ、それを發展させないものである。唯一の活路は、すすんだ（工業的な）國とおくれた（燃料・原料生産の）國とのあいだの經濟的協力原則にもとづいて（前者が後者を掠奪することを原則とするのでなく）、世界經濟を組織することである。そのためにこそ國際プロレタリア革命が必要なのである。」<sup>⑤</sup>

このように、諸民族を經濟的に統合し世界市場をつくり出すまでに發展した資本主義の生産力と、この過程がそのわくの中で進行してきた資本主義的・帝國主義的様式との間には、和解し難い矛盾がよこたわつてゐる。この矛盾は、世界資本主義の廢絶＝世界プロレタリア革命によつてのみ解決される矛盾である。プロレタリア革命の國際的勝利によつて、世界資本主義經濟にかわつて、民族的搾取と「國民的產業的爭鬭」を克服したところの「世界社會主義經濟」が樹立されるのである。<sup>⑥</sup>

(b) すでに指摘した如く、帝國主義の諸條件のもとにあつては、同時的な世界革命はむしろ不可能であり、個々の國における社會主義革命の勝利が合法的なものとなり、かくて、一國におけるプロレタリア革命の勝利と、全世界にわたつて資本主義の廢絶をもたらすところの革命の世界的勝利との間には、一つの歴史的時期がよこたわつてゐるのである。

したがつて、世界經濟の面についていえば、世界資本主義經濟の世界社會主義經濟への轉化は、一舉に、全世界的に同時に、おこなわれるのではなく、一國（あるいは數國）における資本主義經濟の廢絶（社會主義經濟の建設）と全世界にわたる資本主義經濟の廢絶（世界社會主義經濟の樹立）との間には、歴史的一時期が存在するということが理解される。すなわち、社會主義革命が一國から一國へと勝利の行進をおこなうのと相應して、社會主義經濟が一國から一國へと發展し、ついに、資本主義世界經濟にかわつて全面的な社會主義世界經濟の樹立にいたる、歴史的一時期が存在するのである。（このことは、過渡期における上部構造—政治的變革の土臺に對する能動的役割を示している）

このように、資本主義の全般的危機、いいかえれば、二つの體制の共存と鬭爭の時期は、世界經濟の發展過程という見地からすれば、資本主義世界經濟の解體と崩壞の過程・社會主義世界經濟の發生と成長の過程・資本主義世界經濟から社會主義世界經濟への轉化の過渡期として把握されねばならない。このような過渡期にあつては、必然的に、一般には兩者の間の相互關係、特殊的には兩者の間の貿易關係が發生し、兩者の相互影響と鬭爭を通じて、全體としての世界社會主義經濟への過程が進行するのである。

X

X

X

みぎにおいては、二つの體制間の貿易關係の基礎、その合法性がきつたとなつたとおもう。

このように、二つの體制間の貿易關係・いわゆる東西貿易の問題は、資本主義の全般的危機・二つの體制の共存と鬭争の時期・資本主義世界經濟から社會主義經濟への過渡期の問題の一部である。

われわれは、東西貿易の問題についても、單一の資本主義世界市場の崩壊と資本主義市場に對立する社會主義世界市場の形成の問題についても、これを單に歴史、事實的に認識し分析するにとどまらず、世界史的過程におけるこれらの問題の位置とその發展方向を、科學的經濟學の立場から法則的に明らかにしなければならない。このことによつて、たとえば現今の東西貿易の問題についていえば、東西貿易の發展の積極的意義を、勞働者階級の立場・世界プロレタリア革命の立場から、正しく把握することができるのである。

〔註〕 以上述べたことは、世界經濟論の對象と課題について、新しい問題を提起していると考ええる。

こんちの段階では、世界經濟論は、資本主義世界經濟の生成・發展・消滅の法則に關する科學であり、さらに社會主義世界經濟の建設と發展の法則に關する科學である、と定義することができ。ところで、資本主義世界經濟の消滅の過程が現實的に開始したところの資本主義の全般的危機の時期には、資本主義世界經濟の諸矛盾の發展を、資本主義體制と社會主義體制との矛盾からきりはなして分析することは不可能である。資本主義體制と社會主義體制のあいだの矛盾は、「資本主義内部の矛盾ではない。それは全體としての資本主義と社會主義を建設しつつある國とのあいだの矛盾である。しかし、このことは、この矛盾が資本主義の基礎そのものを分解させ、かつ、ゆるがすことをさまたげない。そのうえ、この矛盾は、資本主義のすべての矛盾を根こそぎさらけ出して、それを一つの結び目にあつめ、それを資本主義制度そのものの死活の問題とする。」<sup>⑧</sup>

すなわち、全般的危機のもとの資本主義世界經濟の分析のためには、資本主義體制と社會主義體制との間の矛盾の分析及び社會主義體制の發展法則の分析が、不可欠である。また、資本主義世界經濟の消滅の過程——全般的危機は、同時に、資本主義世界經濟から社會主義世界經濟への一つの過渡期であつて、過渡期の分析のためには、「何へ、どのような體制への移行なのか、——これこそ過渡期そのものの特徴づけるまえにのべなくてはならないことである。」<sup>⑨</sup>



従つて、二つの體制の平和的共存と貿易關係の問題は、現代世界經濟論の one の中心問題である。このような歴史的發展の新しい經驗を一般化する努力を通じて、世界經濟論の理論的體系化の仕事も進むであらう。

〔引用註〕 1、イ・ヴェ・スターリン「わが黨内の社會民主主義的偏向についての報告の結語」（全集⑧三五八頁）

2、イ・ヴェ・スターリン「K・I 第七回執行委員會擴大總會における報告」（全集⑩一二五頁）

3、F・エンゲルス「共產主義の原理」（選集②四七八頁）をみよ。

4、K・マルクス「エンゲルスへの手紙」（選集⑧一四六頁）

5、J. Kuzvicki: Studien Zur Geschichte der Weltwirtschaft, s. 10.

6、K・マルクス「一八四七年十一月二十九日、ロンドンのポーランド革命記念集會での演説」（選集②三二二頁）

7、イ・ヴェ・スターリン「權力獲得前の黨と獲得後の黨」（全集⑤一一八頁）

8、イ・ヴェ・スターリン「黨建設および國家建設における民族的諸契機」（①一九一頁及一九二頁）

9、イ・ヴェ・スターリン「ソ同盟共產黨第十六回黨大會における報告」（⑫二七九頁）

10、イ・ヴェ・スターリン「コミンテルンの綱領について」（⑪一六五頁）

## 二 全般的危機の第一段階における

社會主義ソ同盟と資本主義諸國との通商關係

〔一〕 第一次帝國主義戰爭として爆發した資本主義の第一次の危機の結果として、ソ同盟が資本主義の世界的體系から離脱したことによつて、資本主義は世界經濟の唯一の・すべてを包括する (allumfassend) 制度ではなくなり、資本主義世界經濟の解體と崩壞の過程が現實に開始した。

しかし、ソ同盟が社會主義の孤島として資本主義的包圍の中に生活し建設していた全般的危機の第一段階においては、社會主義世界經濟を組織し、ソ同盟の經濟建設を「共通な社會主義的發展の水路」にふくめて行くといふこ

とは不可能であつた。なぜなら、「正常な世界經濟をうちたてはじめるためには、（すくなくともは、始めるだけの<sup>①</sup>ために）すくなくとも、いくつかの進んだ國でのプロレタリアートの勝利が必要である。」

すなわち、全般的危機の第一段階においては、資本主義は世界經濟の唯一の・すべてを包括する制度ではないとしても、社會主義の陣營は未だ獨自の世界市場をもつには至つておらず、ソ同盟をも含む世界のすべての國々は、唯一の・すべてを包括する世界市場における商品流通に参加していた。また、資本主義はもはや世界經濟の唯一の・すべてを包括する制度ではないとしても、世界經濟としては資本主義的世界經濟が存在するのみであつた。スターリンは、一九二六年に次のように語つた。——「私は資本主義的世界經濟という。なぜなら、それ以外の世界經濟は、現在この世には存在しないからである。」<sup>②</sup>

社會主義ソ同盟がプロレタリアート獨裁の唯一の國であり、彼に敵意をもつ資本主義諸國の包圍<sup>※</sup>という環境の中におかれていた當時にあつては、ソヴェト經濟建設の最も基本的な方針は、ソヴェト經濟を自立的な・獨立の經濟單位に轉化する方向に發展させなければならない、という點にあつた。

※「資本主義的包圍」ということを、單なる地理的概念と考へてはならない。資本主義的包圍というのは、ソ同盟のわが階級敵を、精神的にも物質的にも、金融封鎖によつても、場合によつては軍事的干渉によつても、支援する覺悟のある、敵對的な階級勢力が存在する、ということである。」<sup>③</sup>

スターリンは次の如く語つてゐる。——

「われわれは、わが國が世界資本主義體制的附屬物になつてしまわないように、わが國がその補助企業として資本主義的發展の一般的體系に包含されてしまわないように、われわれの經濟が世界資本主義の補助企業として發展するのではなく、主として國內市場に立脚し、わが國の工業とわが國の農民經濟との結合に立脚する自主的な經濟單位として發展するように、われわれの經

濟を建設していかなければならない。」<sup>④</sup>

「もしわれわれがプロレタリアートの獨裁の唯一の國ではなくて、プロレタリア獨裁の國の、一つであるならば、……そのような條件のもとでは、資本主義的包圍は、われわれにとつて、それが今ある程に非常に危険なものではなかつたであらうし、わが國の經濟的獨立という問題は、當然、うしろにひきさがつたであらうし、われわれはより發展したプロレタリア諸國家の體系の中にふくまれることができたであらうし、われわれはそれらの國家に原料と食糧を供給しながら、それらの國からわが工業と農業を豊かにするための機械をうけとることができたであらう……。」<sup>⑤</sup>

即ち、もしソ同盟が唯一の社會主義國家ではなくて、發展した工業をもつ一つの大ソヴェト國家あるいはいくつかのソヴェト國家と相並んで存在しているのであれば、ソ同盟の經濟を獨立の經濟單位に轉化する政策ではなく、それを「共通の社會主義的發展の水路」にふくめる政策を、經濟建設の基本的方針とすることができたのである。しかし、かような條件のない當時においては、ソ同盟の國民經濟の最小限の獨立が、世界資本主義體制への經濟的隸屬からソヴェト國家をまもるために絶対に必要であつたのである。この基本的立場に立つて、最初の社會主義國ソ同盟は、社會主義的工業化をおしすすめ、しだいに資本主義から離脱して社會主義經濟の水路にはいつてくる他のすべての國々をひきつける中心として役立つような國とするために」全力をつくして奮闘したのである。<sup>⑥</sup>

しかし、みぎのことは、ソ同盟と資本主義諸國との間における通商關係を否定したり、「社會主義經濟を、絶対に封鎖されていて周圍のもろもろの國民經濟と絶対にかわりのない經濟として想像」したりすることを意味するものではない。反對に、ソ同盟は、國民經濟の工業化・農業の集團化・技術的經濟的獨立性の確立を促進するために、資本主義諸國との通商關係を最大限に利用するために努力してきたのである。

(二) 帝國主義諸グループは、ソ同盟のプロレタリア獨裁の權力と社會主義經濟の強化を、資本主義制度の存立に

とつての重大なる脅威とみなし、まず、直接的軍事干渉と全面的な經濟封鎖によつて、これを孤立化し壓殺しようとした。これが、ソ同盟と帝國主義諸國の相互關係の第一の段階である。

しかしこの封鎖と干渉の政策は、ソ同盟の勞働者階級と農民の不屈の力によつて、また第一次大戰とロシア革命の中で未曾有に激化した帝國主義の諸矛盾によつて（階級闘争・民族闘争・平和闘争の激化、帝國主義諸國間の矛盾の激化）、破綻し失敗したばかりか、逆に帝國主義グループの政治的・經濟的困難を一層深める結果に終つたのである。

經濟的側面についていえば、ロシアは、膨大な販賣市場と原料資源を持つ膨大な國であつたが、このロシアを無視すること、世界の六分の一を失ふこと、ロシアの市場と原料資源を失ふことは、資本主義諸國（とくにヨーロッパの）にとつて、自分の生産を縮少しこれを根本からゆるがすことを意味したのである。ことからして、ソヴェト政權に對する政治的敵對にもかかわらず、ソ同盟との平和的共存に同意し、通商關係を結んでロシアの市場と原料資源にわりこもうとする傾向が生じるに至るのである。

また、帝國主義の條件のもとでの、そして全般的危機の時期にさらに強まつたところの不均等發展の法則の作用は、帝國主義諸國間の矛盾の激化と紛争の深刻化、帝國主義者の反ソ統一戦線の脆弱化と分裂を不可避免的にもたつたのであるが、このことによつて、ソ同盟に對する統一した干渉と封鎖は、足もとから崩れざるをえなかつたのである。

こうして、資本主義諸國は、部分的にはあれ、ソ同盟との通商關係にはいらざるを得なくなり、ソ同盟と資本主義諸國との相互關係は、その第二の段階に發展するに至つた。これは、大體において、全般的危機の時期の相對

的安定期に照應している。

このように、資本主義諸國がソ同盟との通商關係にはいらざるを得なくなつたことの基礎には、いいかえれば、ソ同盟が長期にわたる平和の「息つき」を確保し社會主義建設を前進せしめる條件を獲得したことの基礎には、全般的危機のもとでますます深まりゆく帝國主義の諸矛盾の激化が横たわつてゐる。

もちろん、帝國主義諸國がソ同盟と通商關係を結んだからといつて、帝國主義グループの對ソ通商政策は、ソ同盟の社會主義經濟の建設に協力するという原則の上にてはなく、ロシアの市場を自分の經濟的困難のハケ口にし、ソ同盟を世界資本主義體制の附屬物にかえようという意圖の上に立つてゐるものである。その典型的一例として、ドーズ案についてスターリンは次の如く語つてゐる。

「ドーズ案は何を要求しているか。それは、ドイツが賠償支拂金を、主としてわがソヴェト市場を犧牲としてしほり出すことを要求している。ここからどういふことになるか。ここからは、ドイツがわれわれに設備を與える、そしてわれわれがそれを輸入し、農業生産物を輸出するということになる。こうして、われわれは、つまりわが工業はヨーロッパにしばらくつけられてゐることになる。これがすなわちドーズ案の基礎である。」

しかしこれは「主人を考えにいけない決定である。なぜか。なぜなら、われわれはドイツを含めて、それがどんな國であらうと、他國のための農業國にはなりたくないからである。われわれは自分で機械その他の生産手段を生産するであらう。……この點でドーズ案は粘土の足で立つてゐる。」

ソ同盟は、かような帝國主義的政策を、外國貿易の國家獨占の楯ではねかえしなから、ソ同盟の市場と原料資源を無視しえない帝國主義グループの要求を運用して、社會主義經濟建設に必要な機械設備を輸入するために、資本主義諸國との通商關係を廣汎に發展させるために努力した。資本主義諸國との正常な貿易・經濟關係の樹立は、ま

た、帝國主義の戦争政策をうちやぶつて平和的共存の事業を前進させる上で、ソ同盟の經濟建設の平和的條件を確保する上で、帝國主義諸國家間の矛盾を激化させ帝國主義戰線を弱体化させる上で、絶大な意義を有するものであった。

資本主義諸國との通商關係の利用による機械設備の輸入は、ソ同盟の社會主義經濟の基礎の構築、國の經濟的技術的獨立性の確立を促進するために重要な役割を演じた。第一にロシアは經濟的におくれた國であり、國內にある原料を西歐諸國の機械や設備と交換しないことには、自力で運輸をととのえ、工業を發展させることが非常に困難であつた。第二に、ソ同盟は社會主義の孤島であり、工業の點でソ同盟よりも進み、ソ同盟に敵意をもつ資本主義國に包圍されていた。かような條件のために、ソ同盟は、いくつかの工業國でプロレタリア革命が勝利するときまでは、必要な設備と技術を手に入れるために、敵意をもつ帝國主義國家と經濟的に協力する形態を探し求めざるをえなかつたのである。

つぎの若干の統計によつて、社會主義經濟建設の前進とそれに奉仕したソ同盟の外國貿易の姿をみることでござるであらう。

通商關係を通じてソ同盟を世界資本主義の經濟的附屬物にかえようとした帝國主義者の意圖にも拘らず、ソ同盟の經濟建設は前進し、とくに第一次五ヶ年計畫の勝利的成功によつて、經濟的技術的獨立性は一層たかまるに至つた。第二次五ヶ年計畫の時期には、輸入への依存性が強かつた第一次五ヶ年計畫期におけるよりも有利な條件で貿易を行ない得るようになった。またこのことは、輸出面における工業製品の比重の増大にもあらわれている。一九三五年レポートは、「今やわれわれは正常な貿易條件を獲得するに充分な力を備えるに至つた」と語つた。これは、

帝制ロシア及びソ同盟の輸入構成

	1909—1918	第一次五ヶ年 計期間中 1929—1932
輸入總額	100.	100.
機械設備	19.8	51.4
金屬屬	3.4	13.3
棉花及羊毛	14.2	10.6
食料品	18.0	7.1
その他	44.6	17.6

(出所：ミシユスチン「ソ同盟の外國貿易」世界  
經濟調査會譯)

國民經濟構成の變化（工業化の前進）

	總生産額中工業 生産物の比重	總生産額中農業 生産物の比重
1913	42.1	57.9
1929	54.5	45.5
1932	70.7	29.3

(出所：上に同じ)

相對的安定の崩壊と世界資本主義の危機の一層の激化の中で露骨となつた對ソ干渉の策動を一つ一つ打ち破り、平等互惠を基礎とする全面的取引關係を發展させることが可能となつたことを示している。すなわち、ソ同盟と資本主義諸國との通商關係における、さらに新しい段階が展開しはじめたのである。このような基礎のうえで、スターリンはつぎの如く述べている。

「重要なことは、互惠の基礎に立つて通商關係を發展させることである。……もちろん、わが國の天然資源は豊かで多様である。……これはわれわれの可能性の一面にすぎない。他の面は、われわれの農民と労働者が、地主と資本家の昔の壓制からいまや解放されていることである。……個人的消費の需要も、生産的消費の需要も、巨大である。ここにわれわれのかぎらない可能性の第二の面である。このどちらも、アメリカ合衆國とも、他の發展した諸國とも、通商上および工業上の接觸をしてゆくための、重要な基礎をつくり出している。」（「キャンベル氏はうそをついている」全集⑧）

以上の如く、ソ同盟と資本主義諸國との通商關係は、主として以上三つの段階をとつて發展してきた。かように、ソ同盟は、帝國主義者の諸政策を一步一步おしかえし、平和的共存と正常な貿易・經濟關係をうちたててきたのであるが、この基礎には、うち破り難い・たえず増大するソ同盟の力と、全般的危機の條件のもとでたえず深まりゆ

く帝國主義の諸矛盾、いいかえれば、階級闘争・民族解放闘争の激化と帝國主義諸國家間の對立の激化、がよこたわつてゐるのである。

(ソ同盟は一九三九年の第十八回黨大會において、すでに社會主義から共產主義への漸次的移行を現實の課題として提起するまでに發展した。しかし、當時の條件のもとではついに防ぎとめることができなかった、「資本主義諸國間の戦争からはじまつた」(スターリン)ところの第二次大戰によつて、これは一時中断せしめられた。しかし、ソ同盟の存在は、第二次大戰に、反ファシヨ解放戦争の性格をあたえ、その勝利はその後の國際情勢の根本的變化をもたらし、二つの體制間の貿易關係においても全く新しい局面が展開するに至るのである。)

(三) すでに指摘した如く、ソ同盟と資本主義諸國との通商關係の發展は、社會主義體制と資本主義體制の利害の調和を意味するものでは決してない。反對に、ソ同盟に對する軍事的干涉と經濟封鎖によつてソヴェト權力の息の根をとめようとして失敗した帝國主義グループは、通商を通じて、ソ同盟を自らの困難のへかひにし、ソ同盟の社會主義經濟建設をおくらせ、阻止し、破壊し、それを世界資本主義體制的附屬物に轉化せんとする目的を、一貫して追求したのである。だからこそ、國の工業化をすすめるソヴェト經濟を獨立的な經濟に轉化するという經濟建設の方針は、かかる資本主義的包圍のある限りは、絶對的な方針であつたのである。

これに對して、トロツキーとトロツキスト・グループは、さきにもべたソ同盟と資本主義國の通商關係の發展の第二の段階を中心として、一國における社會主義革命の勝利の可能性を否定し、一國における社會主義建設の勝利の可能性を否定し、國の工業化政策に反對し、工業發展のテンポの引きさげを要求し、資本主義諸國との通商の發展をもつてソヴェト經濟の世界資本主義經濟への從屬なりと主張していた。すなわち、トロツキー主義は、ソ同盟の社會主義經濟建設を破壊し、これを世界資本主義體制的附屬物に轉化しようとする帝國主義的政策の、ソ同盟内



における遂行者であり、國際帝國主義者の先遣部隊であつた。<sup>\*</sup>

※その右翼的・降服主義的本質を「左翼的」言辭でおおいかくしたトロツキー主義は、公然たる降服主義・右翼日和見主義としてのブハーリン的潮流と、形式上の「左翼」と右翼との相違にもかかわらず、國內外の資本主義的要害に對する降服主義として本質上は一致している。かかるものとして、それらは、實際上および理論上、國際ブルジョアジーの手先として、ソ同盟の社會主義建設の破壊のために奮闘したのである。

トロツキー主義の「理論」は、第二次大戰後にはアメリカ帝國主義によつて培養された「トロツキズムの發展形態としてのテトロー主義」としてあらわれた。また、それは、労働者階級の陣營内におけるさまざまの色合いのブルジョア民族主義として存在している。それは、現今の東西貿易問題において、労働者階級に道をあやまらせる危険として存在している。したがつて、當面の課題の正しい把握のためにも重要であるから、トロツキー主義の「理論」を、その主要な點について（本論に關係のある分野での問題について）、簡単に示しておく。

1、トロツキー主義は、一國における社會主義革命の勝利の可能性を否定し、さらに一國における社會主義建設の勝利の可能性を否定している。トロツキーは次の如く述べている。

「ヨーロッパのプロレタリアートの直接の國家的支持なしには、ロシアの労働者階級は權力をもちこたえ、その一時的な支配を長期にわたる社會主義的獨裁にかえることはできないであらう。」（一九〇六年）<sup>①</sup>

「世界革命がおこらないならば——引用者——たとえば革命的ロシアが保守的ヨーロッパに面とむかつてもちこたえうとか、または社會主義的ドイツが資本主義的世界のなかで孤立状態で存続しうるとか考えることは、望みのないことであり、……社會革命の見通しを一國のわく内で考えることは、社會愛國主義の本質をなす、あの一國的限制性のいけにえとなることを意味するであらう。」（一九一五年）<sup>②</sup>

「農民人口が壓倒的多數をしめている、おくれた國における労働者政府の地位上の矛盾は、國際的規模、プロレタリアートの世

界革命の舞臺でしか、その解決をみいだすことができないであらう。」(一九二二年)<sup>⑩</sup>

「一國の國家的わく内での孤立した社會主義建設が不可能であることを、あまりにもはつきりと證明している。……ロシアにおける社會主義經濟の眞の昂揚は、ヨーロッパのもつとも重要な國で、プロレタリアートが勝利したのちに、はじめて可能となるであらう。」(一九二二年)<sup>⑪</sup>

また、ジノヴィエフとカーメネフは「技術上・經濟上の立ちおくれのために、ソ同盟における社會主義の勝利は不可能である」と主張した。<sup>⑫</sup>

このように、トロツキー主義は、帝國主義のもとでの不均等發展の法則の意義を否定し、社會主義建設の水路における勞働者階級と農民との間の矛盾を克服し難きものとなし、一國での社會主義の勝利の問題を社會主義の最後の勝利の問題——ブルジョア的秩序の復活からの完全な保障の問題（これは數ヶ國におけるプロレタリアートの勝利によつてのみ達成される）と混同せしめ、かくてソ同盟において勞働者階級と農民の力によつて社會主義を建設しとげる可能性を否定する。すなわち、それは、近い將來に世界革命がなければ、ソヴェト經濟は資本主義的要素に降服しなければならず、ソヴェト權力は變質しなければならないことを意味しており、従つて「一九一七年十月に權力をにぎる必要はなかつた」<sup>⑬</sup>と主張することを意味している。このトロツキーとトロツキー一派の「理論」は、まさに、ソヴェト權力を解體しソヴェト經濟を破壊して、ソ同盟を世界資本主義體制の附屬物にかえようとする國際帝國主義の代辯者であることが明らかである。

2、ソ同盟を經濟的に資本主義諸國から獨立した工業國化する方針に對して、ジノヴィエフ・ソコルニコフ・チャーニン等は、

「スターリンは、われわれの經濟建設の二つの方針をたてたとき、われわれを誤つた考えにひきこんだ。彼は設備の輸入ではな

く完成品の輸入について語らねばならなかった。」(ソコルニコフ)<sup>⑧</sup>

「ソ同盟は依然農業國にとどまらなければならない。わが國は農業生産物を輸出し、外國から機械を輸入しなければならない。」(シャーニンのテーゼ)<sup>⑨</sup>

と主張した。この「理論」がソ同盟を資本主義全體制の附屬物に轉化せんとする帝國主義者の意圖と完全に一致することは論をまたないであらう。

3、ソコルニコフは、第一次五ヶ年計畫の立案に際して次の如くのべた。

「國際的分業の見地からすれば、わが國の如きところにトラクター工場を建設するよりも、既に大量的にそれを生産している國から買つた方が有利である。」<sup>⑩</sup>

第一次五ヶ年計畫を決定したソ同盟共產黨第十五回大會が、この、ソ同盟をして世界資本主義のたのもしき附屬物たらしめるが如き外國貿易の發展計畫を拒否し葬り去つたことは當然である。なお、第十二回大會において、ソコルニコフは、プハーリンとともに、外國貿易の國家獨占を撤廢する提案を行つたことを附記しておこう。

4、トロツキー主義は、ソヴェトの農民經濟を「植民地」とみなし、工業はこれを「搾取」することによつて發展すると主張した。

「生産の社會主義的組織へ移りつつある國が、經濟的に立ちおかれていて、小ブルジョア的であり、農民적であればある程、……それだけ、社會主義的蓄積は前社會主義的形態の搾取にたよることをよぎなくされる。……」(ブレオブラジエンスキー)<sup>⑪</sup>

「これらの諸條件のもとでは、墾作、すなわち農業の潜在的に増大しつつある餘剩商品の量は、社會主義の方向への經濟的發展のテンポを促進しないで、反對に經濟を混亂させ、都市と農村のあいだの相互關係を、……惡化させる要因となるかもしれない。」(トロツキー)<sup>⑫</sup>

ここから、彼らは、工業製品の引渡價格の引上げと農民に對する租税上の壓迫を最大限に大きくすることを主張した。

トロツキー主義のこの見解も、勞働者階級と農民の經濟的協力のおかげに工業を建設するという黨の方針に反對して、工業と農業のあいだの諸矛盾を激化させ、社會主義的工業化の基礎をくつがえすことによつて、社會主義的工業化の破壊を熱望する國際ブルジョアジーの意圖と完全に一致する。

5、トロツキー主義は、社會主義的工業の發展テンポの引下げを要求し、第十六回協議會において五ヶ年計畫の「最小限」案を要求した。トロツキーは、この「降服主義的な減衰曲線の理論」を辨護して次の如くのべている。

「戦前には工業の擴大は、基本的には新しい工場の新設ということにあつた」が、「現在では、擴大ははるかに多く古い工場の利用と古い設備の稼働にある。」従つて「當然ながら、復興過程が完了するとともに増加係數はいちぢるしく低下するはずである。」（社會主義にむかうか、資本主義にむかうか）

スターリン——「わが工業の發展テンポをひきさげることが必要だとしやべつてゐる連中は、社會主義の敵であり、われわれの階級敵の手先である。」

6、このように、トロツキーは、一國における社會主義の勝利の可能性の否定を中心とする幾多の反革命的「理論」を唱えたが、現實に、工業化と農業集團化を基礎とする社會主義の建設は着々と遂行され、彼等の理論の本質は事實によつてバクロされた。

このような段階にいたつて、トロツキーは、ソ同盟と資本主義諸國との通商の發展によつてソ同盟は世界經濟の統制下にたちその法則に従つてしまふ、とのべた。

「われわれは、孤立した戦時共產主義から世界經濟の癒着にますます近づきつつある。」  
「實際にはわれわれはたえず世界經濟の統制のもとにあることになるだろう。」

外國貿易の國家獨占によつて外國資本の侵入を防ぎつつ、工業化の急速な發展のために資本主義諸國との通商關係を利用していたソ同盟にあつて、實際にはこうしたことは全くありえなかつた。このようなことは、「絶対に實現されることのない、資本家のさめどもの夢である。」<sup>③</sup>勿論、通商關係の發展は、世界資本主義經濟に對するソヴェト國民經濟の依存性の存在を意味している。しかしこの依存は相互的なものであり、個々の國民經濟單位の絕對的獨立性などということはありえないことである。しかるにトロツキーは、この依存性をソヴェト經濟の資本主義世界經濟への癒着に轉化し、ソ同盟が世界資本主義の附屬物になつてゐることを證明しようとしている。このトロツキーの理論は、社會主義經濟を建設しとげる客觀的諸前提がソ同盟にはないこと、ソヴェト國民經濟はそのために資本主義世界經濟の附屬物に、世界資本主義の統制をうける經濟單位に、轉化せざるを得ないということを主張して、ソ同盟における社會主義建設の勝利の可能性を、別の面から否定しようとするものである。

〔引用註〕 1、イ・ヴェ・スターリン「權力獲得前の黨と獲得後の黨」（全集⑥一一八頁）

2、イ・ヴェ・スターリン「K・I・執行委員會第七回擴大總會での報告」（④一五二頁）

3、イ・ヴェ・スターリン「ソ同盟共產黨第十六回大會報告」（⑫三二六頁）

4、イ・ヴェ・スターリン「ソ同盟共產黨第十四回大會報告」（⑦三〇四頁）

5、イ・ヴェ・スターリン「國の工業化及び黨内の右翼的偏向について」（⑪二七九頁）

6、イ・ヴェ・スターリン「第十四回大會報告」（⑦三〇四頁）

7、イ・ヴェ・スターリン「K・I・執行委員會第七回擴大總會での報告」（④一五三頁）

8、イ・ヴェ・スターリン「第十四回大會報告」及び「結語」（⑦三五八頁及び二七九頁）

9、10、11、12、イ・ヴェ・スターリン「十月革命とロシア共產主義者の戰術」より引用。（⑥三七八頁—三九八頁）

13、「ソ同盟共產黨（ボ）歴史」（モスクワ版四三八頁）

- 14、イ・ヴェ・スターリン「レーニン主義の諸問題によせて」(⑥九六頁)
- 15、「第十四回大會報告」より引用。(⑦三五七頁)
- 16、「第十四回大會報告」より引用。(⑦三〇四頁)
- 17、デ・イ・チエルノモルヂク「ソ同盟の經濟政策」(外務省調査部版五六九頁)
- 18、イ・ヴェ・スターリン「わが黨内の社會民主主義的偏向について」より引用。(⑧三二八頁)
- 19、右に同じ。(⑧三二九頁)
- 20、イ・ヴェ・スターリン「第十六回大會報告」より引用。(⑩三七三頁)
- 21、イ・ヴェ・スターリン「第十六回大會報告」(⑩二九七頁)
- 22、イ・ヴェ・スターリン「K・I・執行委員會第七回擴大總會での報告」より引用。(⑨一五一頁及び一五四頁)
- 23、右に同じ。(⑨一五五頁)